Ecological Times

前書き

今回は号外ということで先日６月３日に催された【Candle Night in2011 夏】の特集記事です！著者は初めての参加でして、記事にすることもさることながら楽しませて頂きました♪喧騒な毎日から抜け出し、細かに揺れる灯りに心癒される…そんな空間、Candle Night。是非皆さんも行ってみてはいかがでしょう？きっと心軽やかな時を過ごせるはずです。

また今回、イベントの最中にも関わらずインタビューを承けて頂いたリーダーの高橋さんはじめ、メンバーの方々、本当にありがとうございました！

どんなイベントなの？

皆さんは Candle Nigh という学内のイベントをご存じでしょうか？これは環境プロジェクトの一つである【CandleNight】さんが年２回夏至と冬至に開催しているものです。これはもともと日本発祥の〈100万人のキャンドルナイト〉というものにあやかっており、有機的な、あたたかなひかりだけでゆっくりと流れる時間に身を任せるというものです。その中では特に何かをする必要はなく、家族や将来を考えても、友人と世間話に興じても、好きな音楽を聴いても良いのです。ただ普段とは異なるその空間を楽しんで下さい。さらにこのイベントは世界共通である夏至と冬至に行われることで日本国内をはじめ海外の人々とも同じ時間・同じ環境を共有できるのです。その良さは、友人との時間の共有を経験している皆さんにはよく分かると思います。

学内では毎回５号館グリーンホールで開催されており、16 時から 18 時半までいつでも入ることができ、いつでも出ることが出来ます。会場内では飲食自由で、来場者にはお菓子を配布しています。会場内ではその年ごとに決められたテーマにそってアロマキャンドルでモチーフを演出しており皆さんを出迎えます。　　↓今回のテーマ　「花火」

しかし出迎えるのは何もキャンドルだけではありません。演劇研究部による演劇や合唱部、ルンビニー合唱団による歌声、ピアノコンチェルトなどもお楽しみ頂けます。視覚・聴覚・嗅覚・触覚、様々な感覚で私たちを楽しませてくれます。勿論毎回同じ催しを行うわけではありませんので次回参加された時に何をご覧頂くかはそれまでのお楽しみです♪

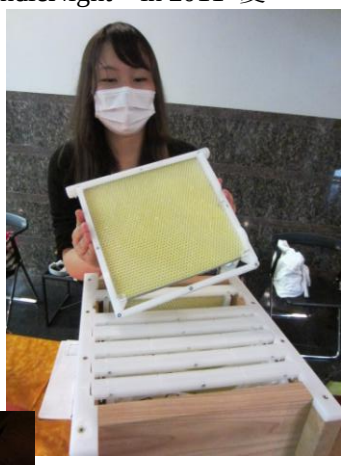
←来場者に配られる廃油から作られたキャンドル

ここで注意事項を記載しておきます。会場内はキャンドルの熱で熱くなっていますし、アロマキャンドルの匂いもあります。気分の優れない方は無理せず退出するかお近くのスタッフまでお声をおかけ下さい。また、会話してもらって構いませんが、ピアノなど演奏中では控えて下さい。受付はグリーンホールの正門側です。食堂側の入り口は関係者以外立ち入り禁止です。

場所	５号館グリーンホール
受付	グリーンホール正門側
日時	夏至・冬至　16:00～18:30

One Planet Café Musashino

CandleNight ではワンプラさんも出展していまして、こちらの取材もさせて頂きました！今回は蜂蜜で作成したキャンドルや、ニホンミツバチの巣箱を展示されていました。この巣箱は日本ミツバチようのもので、中にクイズが用意されており、好評だったようです♪



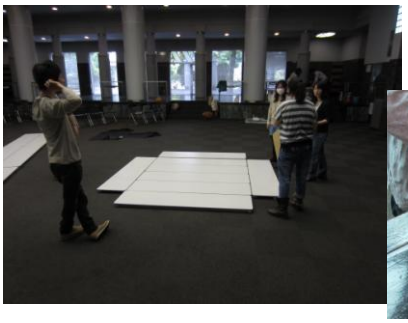
蜂蜜で作られたキャンドルは良い匂いがしますし、体に無害なので安心して使用できるのがメリットだそうです。

→水に浮く半円形の器これも蜂蜜で作られている

以下著者の感想です。お見苦しい文章ですし、上記の情報だけでも十分なのでご覧になりたい方だけどうぞ。

非日常の灯り

私たちの生活に明りは必要不可欠な存在だ。それは日中も深夜も変らず、寝ている時以外私たちは絶えず何かしらの明りのもとにいる。それは視覚に頼りきっている人間として当然のことだが、言うなればそれだけで、明りとは視覚を補助するものでしかない。しかしことキャンドルにおいては灯りとは感じるものであるのだと、私



は今回の CandleNight でそう感じた。

「あはようございます」１限が始まるころ私はグリーンホールを訪ねた。準備の段階から取材するためだ。メンバーの方々がすでに作業されていたが、その時は椅子を片しただけの空間がそこにあり、私にはそこでどのような催しが行われるのか到底想像できなかった。「一体どのような絵が彼らの中に浮かんでいるのだろう？」呆けている私を取り残してメンバーの方々は着々と準備を進めていく…。

CandleNight は 16:00 から始まり、16:00 に照明が落とされる。都合がつく方は是非明りを落とす前から来場して欲しい。そこでは照明のもと、儚げに揺れる、空間に在るだけのキャンドルを見ることができる。その空間と、照明を落とした後の空間を同時に楽しむことができればCandleNightはより鮮明にあなたの記憶に残るだろう。

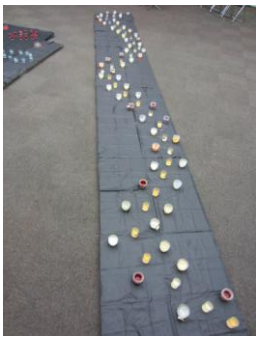
メンバーのカウントダウンが始まる。慌てて構えたカメラが最後の数字を捉えた瞬間 - 闇が訪れる。僅かなタイムラグの後、ふわっと灯りが浮かんだ。それまでも灯っていたはずなのに照明が消えたことでその存在感を露にしたキャンドルに、気づけば構えていた

カメラを下げ、ただただその光景に見入っていた。と、同時に甘い匂いが私をかすめる。アロマキャンドルの香りだ。それまでも漂っていたはずの香り

は暗くなったことでより確かに感じられた。その変化に耳を澄ます必要もなく、周囲から感嘆が聞こえ、何もしていないはずの私は何故かそれを誇らしく感じた。

今回のテーマは「花火」ということで、私は早速中央に設置された花火と川を撮影した。照明を落とす前は伏していた花火は暗がりの中で浮かび上がり、暗闇を美しく照らしていた。照明のもとでは花のようでもあったそれは、暗闇を手に入れることで「花火」となり、面ではなく高さを感じさせるキャンドルの灯が実際以上の大きさを感じさせた。

それは川も同様で、波状に配置されただけのキャンドルがより立体的なうねりを表現し、確かな川を表していた。演劇部の劇が始まる。彼らの手にはランタンが握られている。それが私にはとても感動的で、はっとさせられた。キャンドル、照明としては弱すぎる灯り。しかしその揺れる灯は確かな何かを私たちに感じさせてくれた。



…一息つくため一旦会場を抜ける。まぶしい太陽、蠢く人、いつもの喧騒がそこにはあった。「ああ、大学内だったな」自然とそんな言葉がこぼれた。振り返ればいつも通りの校舎、しかしそこには非日常が内包されている。キャンドルによって作り出された非日常が。キャンドル、それは**―非日常の明り―**

記事・取材：三井翔太
協　力：CandleNight 様

Ecological　Times
2011/6/26
代表：三井翔太（環境学専攻２年）
Email：s1035041@stu.musashino-u.ac.jp
武蔵野大学（東京都西東京市新町 1-1-20 ）
制作：Ecological　Times　Project